

## 巻頭言

# 無関心という名の病理

田邊祥二

(NHKディレクター)

今日は情報氾濫の時代、価値観多様化の時代と言われるが、むしろ情意的情報の欠乏、宗教的価値観喪失の時代ではないだろうか。情報というものを大別して、知的言語情報を不可説（非言語）情報とすれば、知的言語情報は出版物やインターネットでいくらでも手に入れることができる。しかし不可説情報、例えば武術、スポーツ、アートの制作、さまざまな芸道は知育のみでは手に入れることはできない。特に宗教的情操は不可説情報の最たるものである。

「信心」とか「定力」とか言われるものは全人格的な非言語情報である。今日の日本においてはこの部分の情報極めて貧困になっているのではないか。もし学校が知的言語情報のみを得る箱であるならば、学校不用

論が出て不思議はない。予備校だけで十分である。最近の世相を見ると動機不明の凶悪な犯罪、モラル喪失の組織犯罪、自殺者の増加など精神病理の問題としてよりも、全人格的な不可説情報の貧困化に起因した社会風土の病理ではないだろうか。愛や慈しみの逆語は憎しみと言われているが、そうではなくむしろ無関心ではないのか。他人の悲しみ苦しみに感応するためには、それに同調する非言語情報たる情操「悲」<sup>カルネ</sup>が不可欠である。他人の不幸や苦悩に無反応となり、すべて他人事になってしまふ無関心という名のエゴイズム。この無関心は著しく社会全体のモラルを低下させる。このような社会はやがて衰亡する。「知育」ではなく「智育」の教育こそ教育の本義と思う次第である。